

大覚寺正寢殿帳台構の桐竹蒔絵装飾

灰野 昭 郎

- (一) 大覚寺正寢殿の帳台構
- (二) 桐竹蒔絵の系譜
- (三) 大覚寺帳台構の桐竹蒔絵
- (四) 高台寺蒔絵の桐蒔絵

桃山時代、蒔絵が大建築の室内装飾に施こされたことは、風になられている。その遺構は現在四例が数えられる。

その(一)は高台寺霊屋内陣、(二)は都久夫須麻神社本殿、(三)は醍醐寺三宝院白書院の框であり、(四)が大覚寺正寢殿の帳台構である。(一)(二)(三)の遺構についてはすでに詳細な研究がなされており、その概要はすでに刊行されている。^{註1}しかし、(四)の大覚寺正寢殿の帳台構に施こされた桐竹蒔絵については、図版などでは紹介されているものの、^{註2}その本格的な資料研究はなされていない。本稿では『学叢』三号の「都久夫須麻神社本殿の蒔絵装飾」に引続き、この近世初頭の室内装飾にみられる蒔絵について論じてみるものである。

——大覚寺正寢殿の帳台構——

まず、この蒔絵装飾が施こされている、大覚寺正寢殿 御冠の間の帳台構について建築史の研究を参考にして、その概観をのべる。

帳台構とは元来帳台の意で、平安時代、寢殿の母屋に一段と高く台を設け、四隅に帳を垂らした貴人の座す場所をいい、室町時代には書院造りの上段の間、あるいは貴人の対面の場所を示すようであり、一段と高く框を設け、柱を立て長押を用いて枠組をし、その内に襖をはめこむという構造をもつ。

この大覚寺正寢殿「御冠の間」の帳台構については「大覚寺の建築」で大森健二氏が次のように解説をしているので、引用させていただく。

「上段の間としての「御冠の間」は床、棚を欠いているし、また天井も上段の間にふさわしい豪華なもので構成されていないが、それらをすべて補うものとして、位置的には若干問題があるものの、蒔絵仕立ての帳台構をはじめこんだものであろう。事実、この蒔絵の帳台構一構えは、部屋飾りの不備を充分補っており、かつ正寢殿随

一の見所となっている。

帳台構は本来は寢所への入口の構成とみるべきで、天正度造営の常御殿にも中央列の寢所の入口に設けてあり、これが本来の使い方と考えられるが、後には框や柱を漆塗りとし、金箔押し金の物を取りつけることにより、一種の部屋飾りとなる。武家書院においては武者だまりとなり、たとえば二条城では將軍の出入口ならびに警固の武士たちの控え室となるが、滋賀県園城寺光浄院客殿のように全然戸の動かない帳台構もあるから、部屋飾りとしての使用もあったものと考えられる。」

この帳台構の製作年代については、結論をいそぐと、いまだ定説というものはないらしい。正寢殿（重要文化財 大覚寺客殿）自体が、「正寢殿の建立された年代については実は今日のところはつきりしない。寺の説明では、正寢殿の主室である「御冠の間」で南北両朝の講和が行なわれたとなっているが、それでは建物の建立年代を後宇多院の頃まで遡らさねばならず、これでは、あまりに古すぎるのである。」^{注4}「建物自体（正寢殿）は前記のように後世の改造の疑いが濃厚であり、いろいろの痕跡があり、また修復のあと著しく、はっきりした建立年代を指示することはできにくい、軒まわりの構成、肘木の形式、その建築的な木割りの技法からみて、一応桃山時代に建立されたものとみてよいであろう。」^{注5}「正寢殿は桃山時代の書院建築を寛永末頃、現在の如く改造したものといつてよいかも知れない。」^{注6}「何れにしても正寢殿は、今後の調査に俟たねばならない種々な問題を残している。」^{注7}

この正寢殿正面にある帳台構は、高一八五・〇糎、巾三八二・四

糎という豪華なもので、框に四本の柱と長押さらにその上の貼紙の上部に細い枠取をしている。

内側二本の柱は巾一三・八糎、長さ一三七・五糎、両角を唐戸面取している。外側二本の柱は巾一〇・二糎でやや巾狭ま、柱内角のみを唐戸面取する。長押は巾一二・六糎上角のみ面取、框は奥行一七・七糎、二本の棧を設け、襖をはめこんでいる。

柱・框・長押、上部枠取はすべて黒漆塗。

すべての面に桐竹の蒔絵を配している。即ち、柱には三組づつの桐竹文を、長押には六組、上部枠組にも六組、框上面に三組の桐竹文を散らしている。そしてこれらの配置は規則的に施こされたもので、柱の桐竹文は縦に意匠され、約二十糎ほどの長さの範囲で蒔絵され、長押・上部枠組は横に意匠され、約四十糎ほどの中の範囲で蒔絵されている。また、帳台構中央の襖の棧にもこの桐竹の意匠が三組蒔絵されていたが、現在、襖の部分は山水画と共に新補され、この蒔絵はみることが出来なかった。

これらの蒔絵は黒漆面に施こされているが、現在この漆面はかなりきつい段紋がみられる。すべて金平蒔絵、桐樹に桐花と竹を繪梨地、描割、付描で描いている。これは正に高台寺蒔絵の技法で、桐葉の虫喰文様を繪梨地で表現するなどはその典型的意匠である。また桐竹の配分を桐一竹二、桐一竹一などと使いわけて、意匠に変化をつけるなどもしているが、この技法、意匠については後稿で細見する。

金具は各角と、長押、上部枠取の中央に打たれるが、すべて金銅製、桐竹文を打出し、地文は魚々子地とし黒漆を施こす。

帳台構に貼付された山水画（襖部は模写）は狩野山楽（一五五九〜一

六三五)筆^注。この「御冠の間」の壁貼付襖、障子腰貼の山水図もすべて山楽筆とされている。

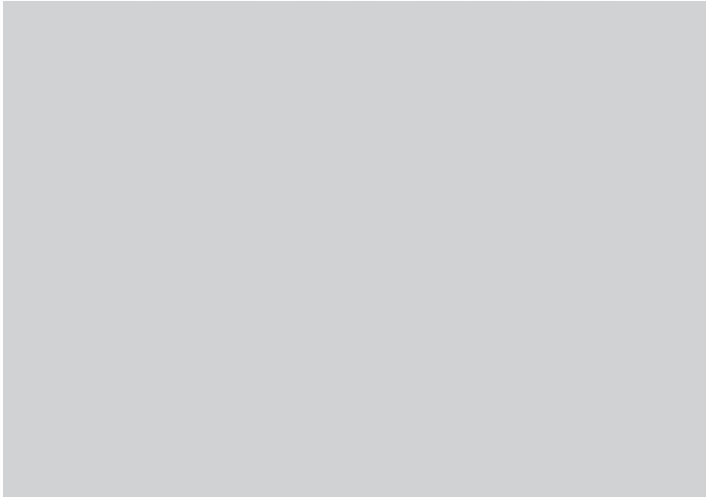
——桐竹蒔絵の系譜——

桐竹というと勿論、典型的な吉祥文様であり、桐竹に鳳凰が加わると天子に結びつく意匠である。この思想は中国唐代にすでに成立しており、我が国にもはやくからもたらされていたことは推測にかたくな。

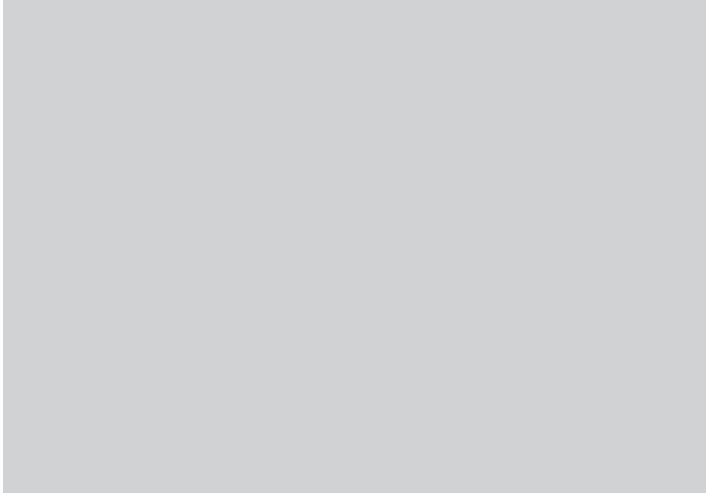
しかし、この思想を意識した桐竹の意匠の遺品となると、どの辺

まで遡るであろうか。光背や博の鳳凰、正倉院御物の瑞鳥、伽陵頻伽など単一の鳳凰系意匠を除けば、漆芸品では、やはり、明徳元年(一三九〇)進調の熊野速玉大社の古神宝がその最古の遺例であろう。これらの意匠は平安期にその範を得ているとは思われるが。

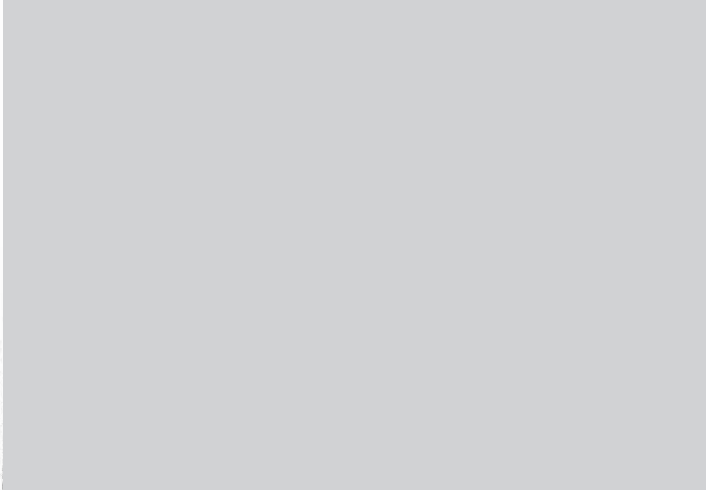
熊野速玉大社には明徳元年(一三九〇)禁裏、仙洞御所、室町殿(足利義満)により三所神殿へ神宝調献が行なわれ、同時に若宮殿、中四所宮、下四所宮、九社と摂社である阿須賀之宮、合計十社に諸国の守護職が手箱を奉納している。これがいわゆる熊野速玉大社古神宝類の手箱である。南北朝・室町初期の蒔絵の一大遺品群である。これらの手箱の意匠をみると、桐 二合。桐唐草 一合。架菊 一合。



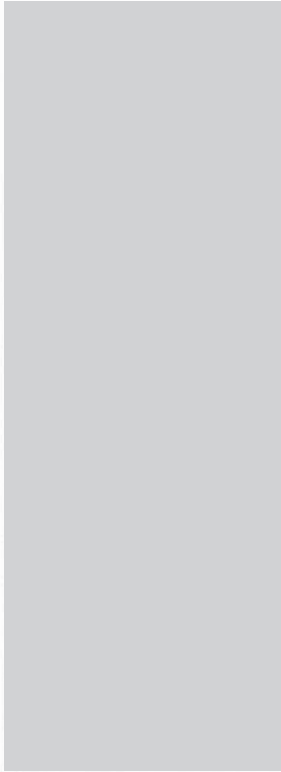
挿図1 西之御前奉納
桐蒔絵手箱 熊野速玉大社



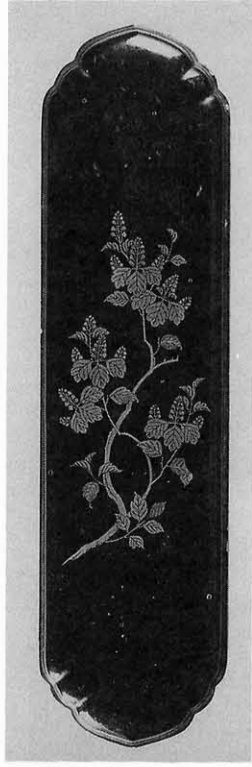
挿図2 中之御前奉納
桐蒔絵手箱 熊野速玉大社



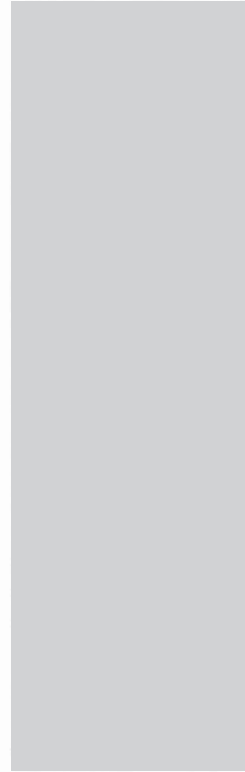
挿図3 証誠殿奉納
桐蒔絵手箱(部分) 熊野速玉大社



挿図6 桐蒔絵笏箱
熊野速玉大社



挿図5 桐蒔絵笏箱
京都国立博物館



挿図4 桐蒔絵玉佩箱
熊野速玉大社

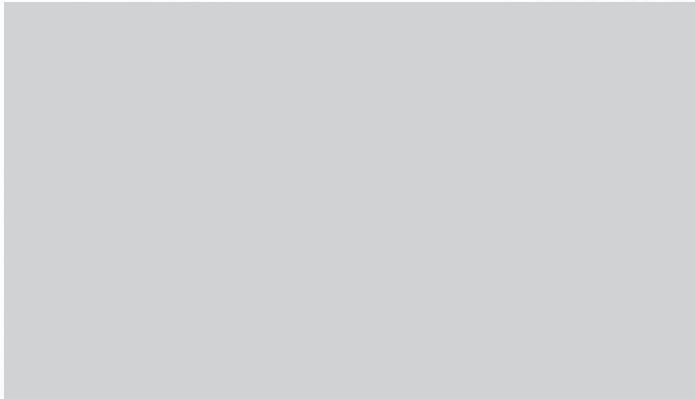
牡丹 一合。橘 一合。菊唐草 一合。唐花唐草 一合。名木 一合。松鷄冠木 一合。橘花 一合。松椿 一合。となる。技法も沃懸地、厚梨地、梨地の三種の地に分け、金蒔絵、銀蒔絵、螺鈿とその装飾技法も異にしている。

ここで桐蒔絵の手箱に注目してみたい。桐意匠の三合の手箱はその奉納先は、西之御前、中之御前、証誠殿の三所神殿であり、禁裏、仙洞御所、室町殿の調献になる古神宝手箱の中心をなすものである。それ由、技法も沃懸地に金銀高蒔絵、螺鈿を加えた最高の技術を駆使している(挿図1~3)。この事実は桐意匠がこの手箱意匠中、最も格の高い意匠と意識されて施こされていることが証明される。またこれらの手箱にはそれぞれ、内容品として鏡、鏡箱、櫛、櫛箱、大小懸子、薰物箱、白粉箱、齒黒箱、櫛払、白粉解、齒黒解などが付属するが、これらにはすべて手箱と同意匠が施こされている。

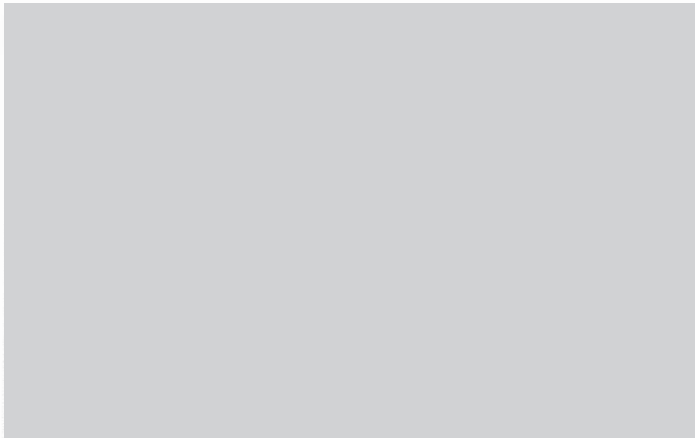
さらに、この古神宝類には硯箱が一合付され、この意匠も土坡に桐樹である。蓋表は濃梨地に金銀薄肉蒔絵とするが、蓋裏、見込に描かれる桐樹は平蒔絵で、意匠的には大覚寺帳台構の桐樹の原型といえる意匠である(図版1~3)。

またさらに、古神宝類のうちには蒔絵の遺品として、前述の硯箱や鏡箱、平胡籙、弓、玉佩箱、笏箱、冠箱、埴鞋箱、御衣箱、衣架などが伝来するが、この内の玉佩箱二合(一合は旧阿須賀神社古神宝、現在京都国立博物館蔵)(図版4挿図45)について述べると、実はこの同形同寸の二合にも桐樹蒔絵が施こされている。(因に熊野速玉大社では玉佩箱と称し、旧阿須賀神社古神宝では笏箱と称し笏が納められている。)『新宮御神宝目録』(明徳元年奥書)には「御笏一枚、以白薄様一襲畏之納銀蒔繪箱一合」とあり、笏箱は明らかに銀蒔絵が施こされていたも

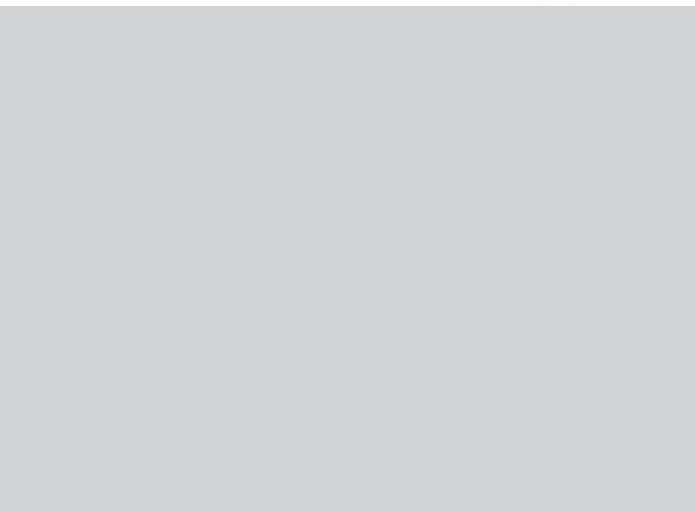
のと推察される。熊野速玉大社には現在榊蒔絵の笏箱が伝存し(挿図6)これには明らかに銀蒔絵が施こされている。そのことから、この二合はその形式からも共に玉佩箱であったものではないかと推測される(旧阿須賀神社の笏箱は本来玉佩箱であったと推定される)。そして興味深いのは、蓋表の桐樹は金平蒔絵でなされ、葉の一部に絵梨地が施こされ、葉のうちには虫喰跡を絵梨地で表現しているものがあることである。正に高台寺蒔絵の手法であり、大覚寺帳台構の蒔絵に酷似するものといえる。それ由これらの玉佩箱は明徳期の奉納まで遡ることは意匠・技法上からも無理があり、桃山期になんらかの形で別納された可能性があるとされなければならない遺品であろう。



挿図7 桐竹鳳凰蒔絵硯箱 サントリー美術館



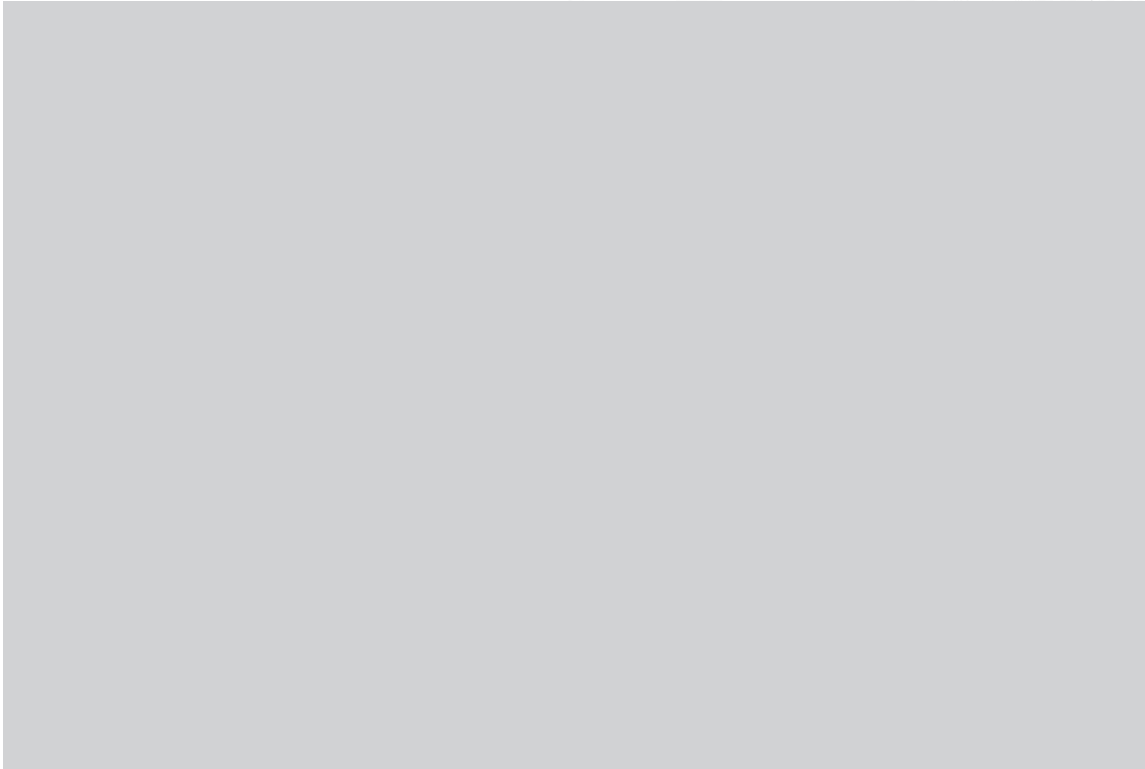
挿図8 桐竹鳳凰蒔絵文台 サントリー美術館



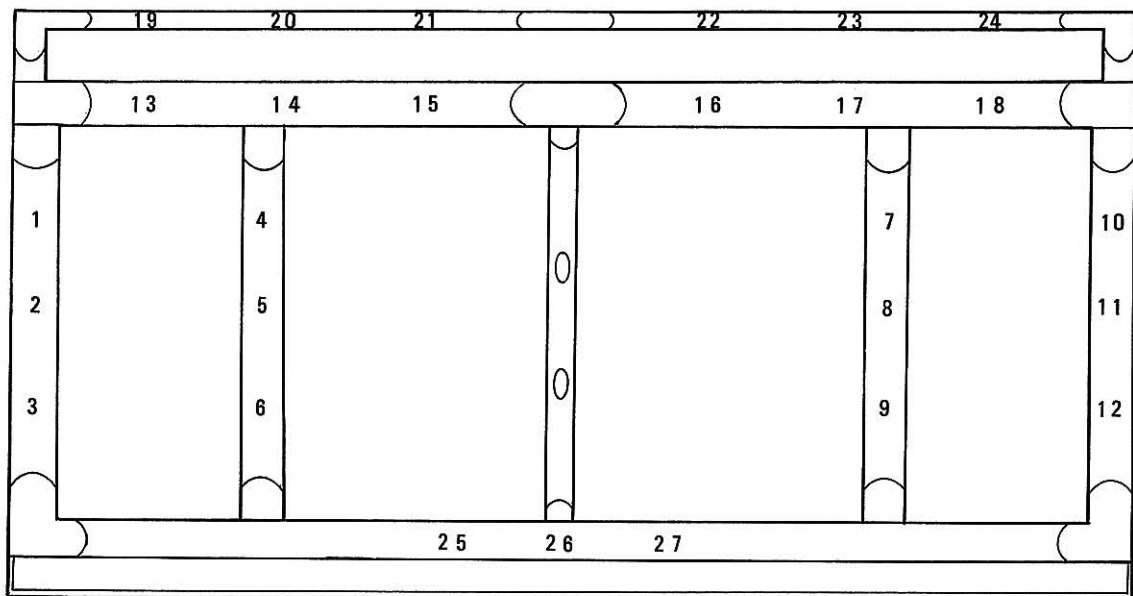
挿図9 桐鳳凰蒔絵長持 大阪 個人

次にほぼ製作年代が明らかな遺品は文安二年(一四四五)千秋勝季が熱田神宮に奉納した二面の鏡があり、その一面の鏡箱の蒔絵意匠が桐竹鳳凰である。室町時代の桐竹意匠といえよう(図版5)。この円型内に配された意匠はやや絵画的で土坡に流水、桐竹に鳳凰というものである。そして、蓋裏、底部には流水に土坡、松竹に鶴亀という蓬菜文様で(図版6)、懸子は松喰鶴が意匠される。また、もう一面の鏡箱の意匠も蓬菜文であり、桐竹鳳凰はこの蓬菜意匠の一部として用いられている。同思想のもとに配されたものであろう。

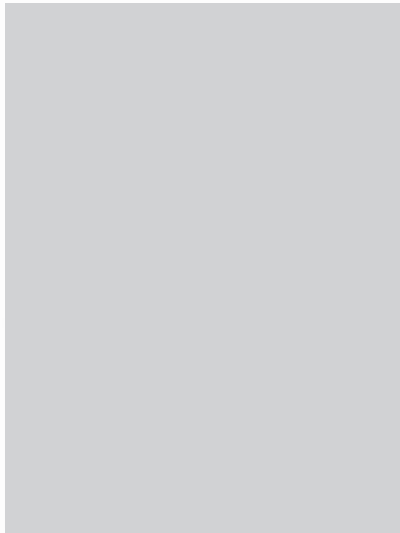
この鳳凰を中心とした桐竹文様は近世には障屏画など大画面に極彩色で描かれ、華やかに室内装飾に供せられる。蒔絵においては都



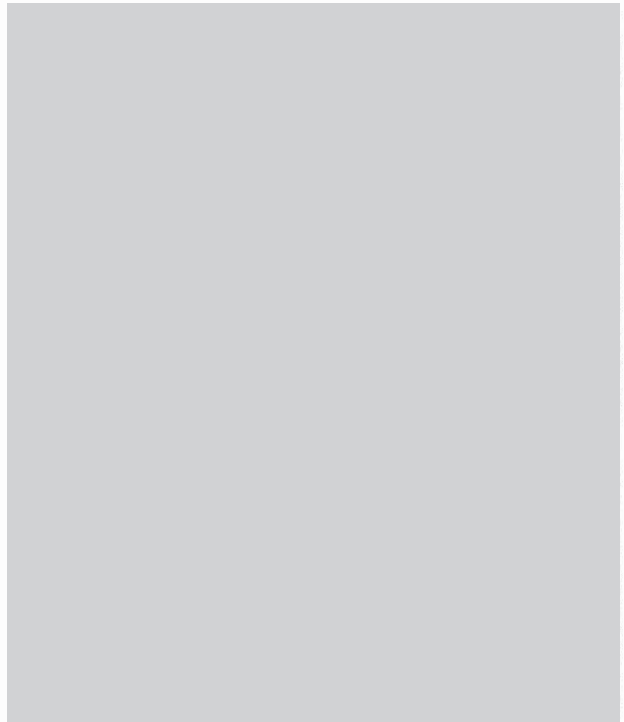
挿図10 桐竹蒔絵帳台構 大覚寺正寝殿御冠の間



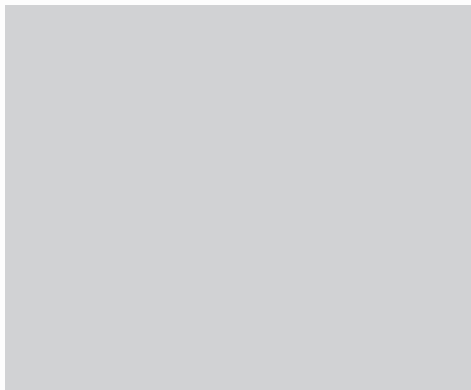
挿図11 同 帳台構 蒔絵配置図



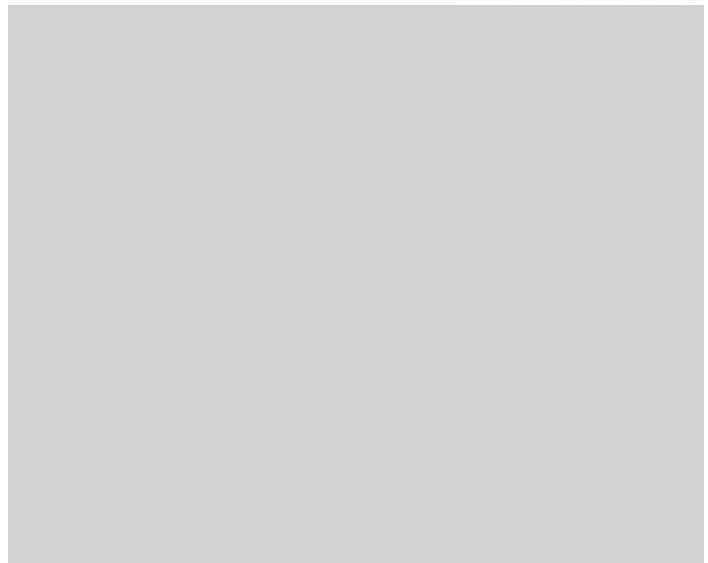
挿図13 芒桐紋蒔絵器局
サントリー美術館



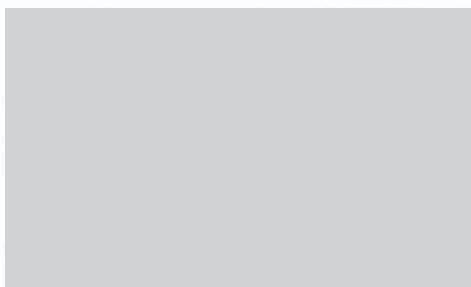
挿図12 薄桐紋蒔絵厨子扉 高台寺霊屋



挿図15 桐紋蒔絵懸盤 京都個人



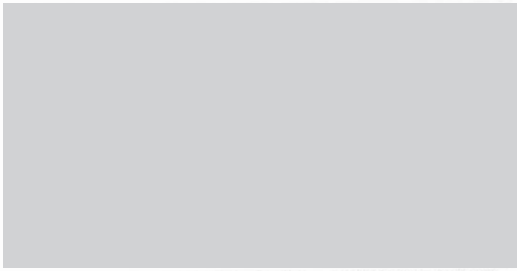
挿図14 芒桐紋蒔絵唐櫃 豊国神社



挿図16 桐紋蒔絵膳
サントリー美術館



挿図17 桐紋蒔絵七碗 サントリー美術館



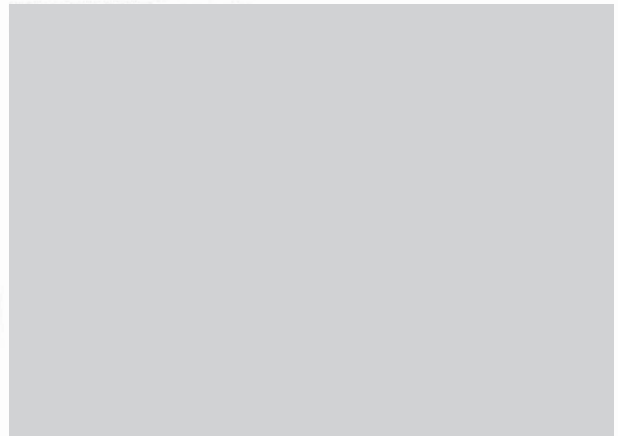
挿図19 桐紋蒔絵角盥 醍醐寺三宝院



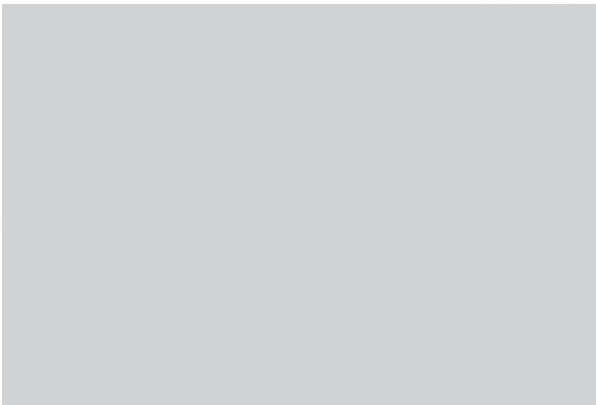
挿図18 桐紋蒔絵盆 高台寺



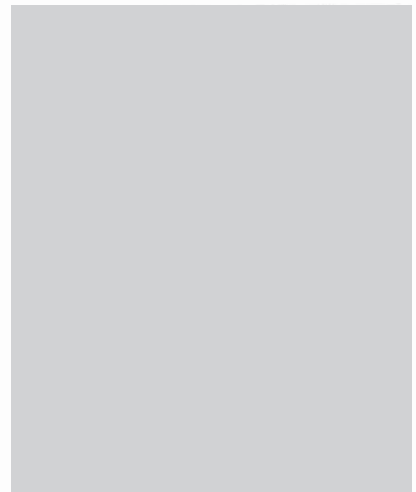
挿図20 桐紋蒔絵炭取
醍醐寺三宝院



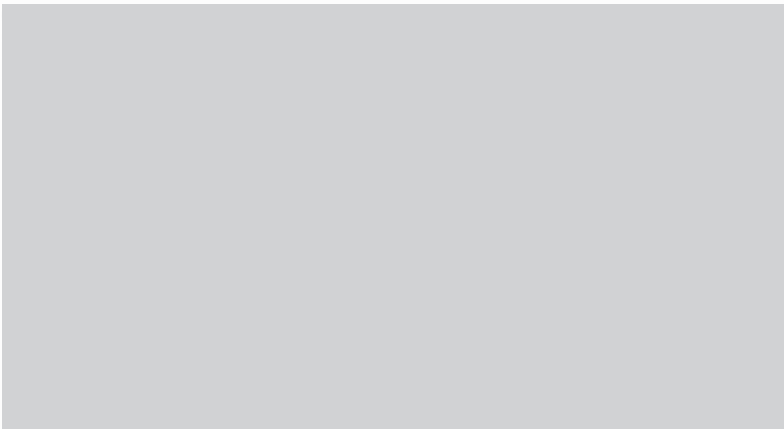
挿図21 桐紋蒔絵刀掛 高台寺



挿図23 桐唐草蒔絵唐櫃 豊国神社



挿図22 桧垣桐唐草蒔絵角赤手箱
サントリー美術館



挿図24 桐蒔絵棚（天板） 高台寺

久夫須麻神社本殿の蒔絵や豊国神社桐樹鳳凰蒔絵唐櫃（註）やサントリ―美術館桐竹鳳凰蒔絵文台硯箱や大阪個人蔵桐竹鳳凰蒔絵長持（挿図7～9）などがこの系譜に続くものである。

—大覚寺帳台構の桐竹蒔絵—

大覚寺帳台構の桐竹蒔絵は、この縦横に細長い画面に合計二十七組の桐竹を配している。その配置は（カラー図版12挿図10挿図11）の示す通りで、縦に長い構図をとるもの①～⑫（図版7～18）。横に長い構図をとるもの⑬～⑲（図版19～33）である。縦に長い構図、即ち柱に施こされた蒔絵は柱が唐戸面取されており、①②③は面取部から右方面にかけて蒔絵は伸び、⑩⑪⑫は面取部から左方面へと蒔絵は伸びている。さらに④⑤⑥⑦⑧⑨は左右両面に蒔絵の先端は伸びている（図版3435）。⑬⑭⑮⑯⑰⑱は長押しに施こされた蒔絵。⑲⑳㉑㉒㉓㉔は帳台構の最上部の蒔絵。㉕㉖㉗は框部の襖の棧前面の蒔絵である。そのためかなりのすれが認められる。

この蒔絵意匠の最大の特長は桐と竹のみの組合せによって構成されていることである。

桐、竹の形式はすべて同形式で、縦長、横長とで構成している。また細見すると、両端の柱の①②③、⑩⑪⑫は桐樹一、竹樹一の組合せで、㉕㉖㉗はすれの為不明ながら、これらを徐くすすべては桐樹一、竹樹二の組合せとなっている。この単純な桐樹と竹樹の二十四の組合せではあるが、これらの構成はそれぞれに変化をつけ、同一構成のものは一つとしてない。これらの大画面の蒔絵は同一工人の手になるものではなく、工房単位の仕事と思われるが、その工房のデザイナーの感覚には並々ならぬものがある。さらに蒔絵の作品と

しては大形のものであり、その破綻のない意匠、技法には熟練された工人の技が感じられる。この事は都久布須麻神社本殿の柱の蒔絵に明らかに数人の工人の手になり、その技術の差が歴然と感じられるものからすると、この桐竹蒔絵の蒔絵師の一群は、すべて高度な技術者であり、帳台構の蒔絵という格式の高さからしてもそれは当然のことといえるのである。

また、この帳台構には十六ヶ所に飾り金具（図版36）が打たれている。金銅製で猪目を透した両端をしぼめた大型長方形の金具地文は魚々子地、蒔絵と同じく桐、竹樹を大らかに刻したもので、いかにも桃山風の飾り金具である。

さらに、ここに施こされた意匠は桐竹のみである。「桐・竹」から連想される意匠としては当然鳳凰である。ここにあって鳳凰を蒔絵せずにおいたのは、その前に着坐されるべき人物、天子（天皇）こそが鳳凰であるとの意匠構成にするものであろう。

—高台寺蒔絵の桐蒔絵—

帳台構の技法は前述した如く、黒漆地に金の平蒔絵である。桐の葉には部分的に絵梨地が施こされ、描割や付描の技法も併用されている。この技法は明らかに高台寺蒔絵そのものの特長ある技法で、十六世紀末期から十七世紀初期に極く短期間に隆盛をみた蒔絵技法である。

また、この桐に注目すると、前出の熊野速玉大社の玉佩箱、旧阿須賀神社の笏箱のそれに酷似する。その技法、意匠はまさに同時代、同工房での製作になるといっても過言ではあるまい。桐の葉にわざわざ虫喰跡の意匠などを表わすことはそれを端的に示している。こ

これは高台寺蒔絵の大きな特長の一つである。ただ一つの差異を掲げるならば、これは桐樹の根の部分であろう。しかし、これは両箱の意匠が桐の折枝を表わしているものであり、帳台構のそれは自然に生える桐樹を表現している違いである。

さらに、ここでややこの蒔絵より遡る製作と推察出来る二つの箱を掲げて比較、検討してみたい。その一つはサントリー美術館蔵桐竹蒔絵硯箱であり(図版37)、京都個人蔵桐竹蒔絵手箱(図版38、41)である。硯箱(縦二〇・八、横一六・五、高四・〇)は蓋表の四辺を面取した被蓋迭、見込は筆架式とし、左方の下水板に水滴と硯を嵌入している。総体に黒漆塗、淡梨地を施こし、蓋表に土坡に桐樹と四本の竹を配し、蓋裏は見込には桐と竹の折枝を散している。技法は研出蒔絵。手箱(縦三三・五、横三〇・一、高一五・七)は方形隅丸、蓋には甲盛、鹿居を設け、錫の置口の合口造。典型的な手箱の形式をもつ。蓋表から側面にかけて土坡に桐樹と竹を配し蓋裏にもやや簡略化されるが同意匠を施こし、懸子には桐、竹の折枝を散らす、総体黒漆塗に淡梨地、意匠はすべて金粉研出蒔絵。側面の円形総金具は金銅製で同じく桐竹を透彫で表わす。

硯箱、手箱共に室町時代(十五世紀)の製作と推測されるが、意匠的には帳台構の桐竹に共通するものがある。細見すると土坡や桐樹、花竹の節などにはやや写実性が強調されている。そして、技法は研出蒔でもあり高台寺蒔絵の先駆をなすものと考えべきものである。しかし、基本的には、この種の桐竹蒔絵の流れの上流にあることは肯首される。と、するとこの帳台構の桐竹の蒔絵は高台寺蒔絵中では桐竹意匠の系譜の伝統性をふまえたものとして位置付けられるものである。もっとも帳台構という調度の意匠としては当然のこと

であろう。しかし、格式の象徴のような帳台構の桐の葉意匠にわざわざ虫喰の部分蒔絵するというおおらかさは近世ならではのものである。やや中世のかたさをその意匠に残すものの、高台寺蒔絵そのものと認めざるを得ない。

高台寺蒔絵の桐意匠を分類すると次のようになる。高台寺蒔絵の意匠は秋草が主題となるものが多いとされるが、そこに菊紋、桐紋がしばしば散らされている。代表的な遺例三点を挿図で掲げてみる。(挿図12、14)次に桐紋のみが意匠された遺例(挿図15、21)、さらに桐唐草の遺例(挿図22、23)などが掲げられる。

このように高台寺蒔絵の桐意匠の分類からすると、この帳台構の桐竹意匠はやや趣を異し、室町以来の伝統的なものに属する。とすると高台寺蒔絵中では極く初期の遺例と推測すべきものである。

その他、特殊な例で高台寺蔵桐蒔絵棚の桐樹(挿図24)がある。しかし、この蒔絵は高台寺蒔絵技法である平蒔絵ではなく、薄肉の高蒔絵で描かれている。伝統的な意匠である土坡に桐樹を、これも中世以来の高蒔絵の技法で施したもので、特殊な遺例であろう。

前述の如く、この正寝殿の建造期ははっきりせず、桃山期の書院造を寛永末頃、現在の如く改造したものと^{註11}いい、その改造以前の建造物がいずれのものであったかは不明である。しかし、このような豪壮な遺構、伝統的な意匠、高台寺蒔絵初期の遺例などから推測すると、まず考えられる建造物は聚楽第ではなからうか。聚楽第は秀吉が関白となった天正十三年(一五八五)七月に起工し(本朝通鑑)、同十五年九月に竣工(言經卿記)。同十六年四月十四日から十八日にかけて後陽成天皇の行幸を得ている。この帳台構はこの時の玉座には最

もふさわしいもののように思われる。豊臣秀吉・後陽成天皇・聚楽第・室内装飾としての高台寺蒔絵と結びつける遺構である。しかし、これはまったく推察の域をみじんも出ない。聚楽第はその後、関白秀次の居所となり、その没後、文禄四年（一五九五）に秀吉によって破壊される。その建築物の多くは築城中の伏見城に移築されたという。この帳台構が直接ではなく、いずれかの経過をへて（伏見城経由と考えたいが）、何らかの縁で大覚寺の正寝殿「御冠の間」に移築されたことは考えられなくはないのである。とすると、桃山期の建築室内装飾の蒔絵としては四例中最も古い遺例となろう。

〈注〉

- 1 吉村元雄『高台寺蒔絵』 京都国立博物館編 昭和四十六年三月
灰野昭郎「都久布須麻神社本殿の蒔絵装飾」『学叢』三号 昭和五十六年三月
- 2 佐和隆研『醍醐』 講談社 昭和四十二年十月 他
- 3 中村昌生「大覚寺正寝殿および宸殿について」『障壁画全集 大覚寺』美術出版社 昭和四十二年三月 他
- 4 大森健二「大覚寺の建築」『大覚寺』 主婦の友社 昭和五十年三月
注3に同じ
- 5 同
- 6 同
- 7 注2に同じ
- 8 同
- 9 拙著「都久布須麻神社本殿の蒔絵装飾」参照
- 10 同
- 11 注2に同じ

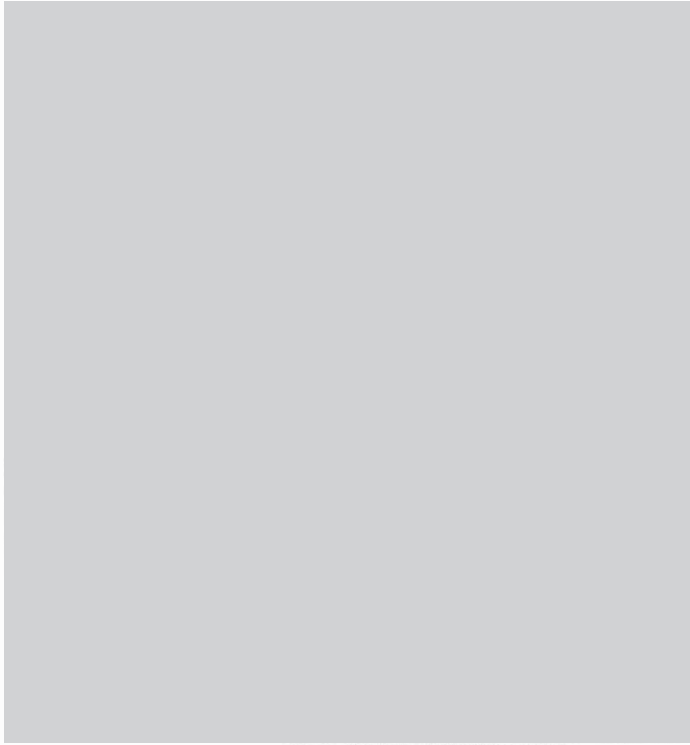


図3 桐蒔絵硯箱（見込）熊野速玉大社

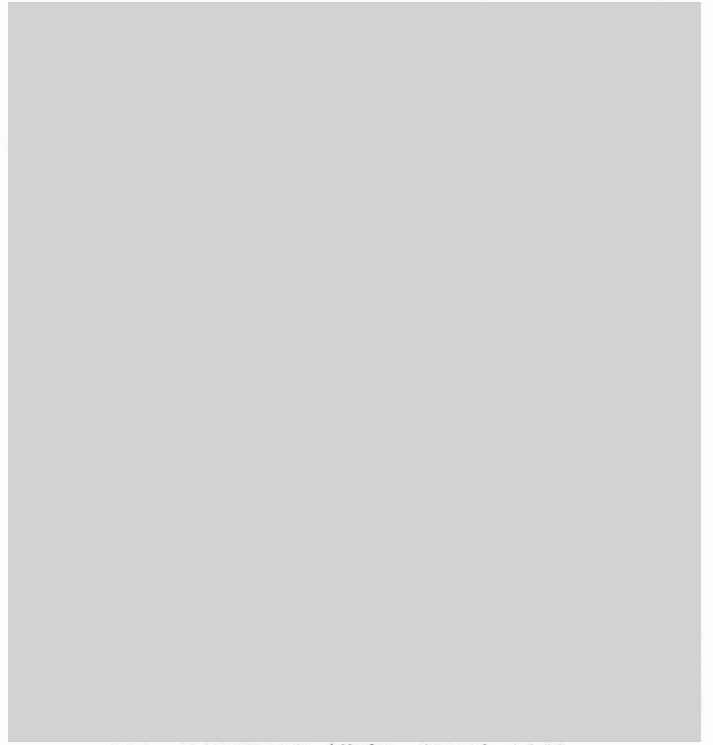


図1 桐蒔絵硯箱（蓋表）熊野速玉大社

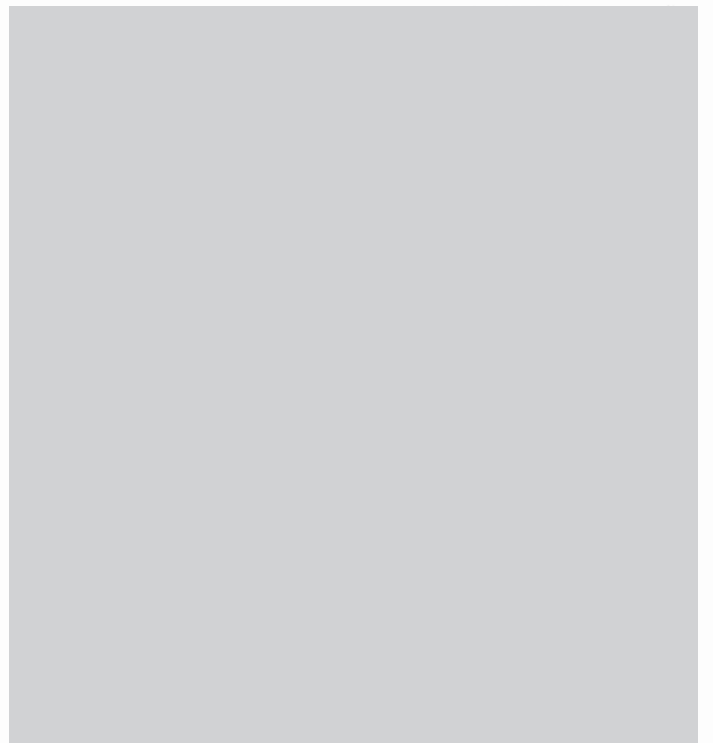


図2 桐蒔絵硯箱（蓋裏）熊野速玉大社

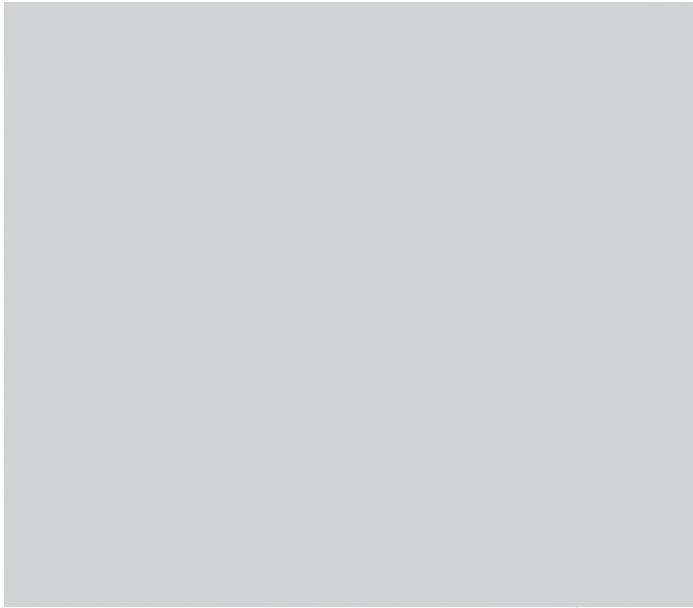


图5 桐竹鳳凰蒔繪鏡箱（蓋表） 熱田神宮

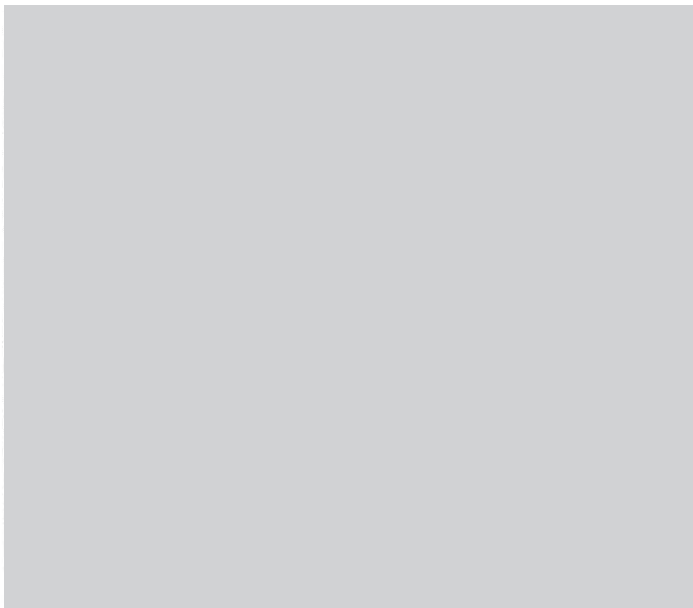


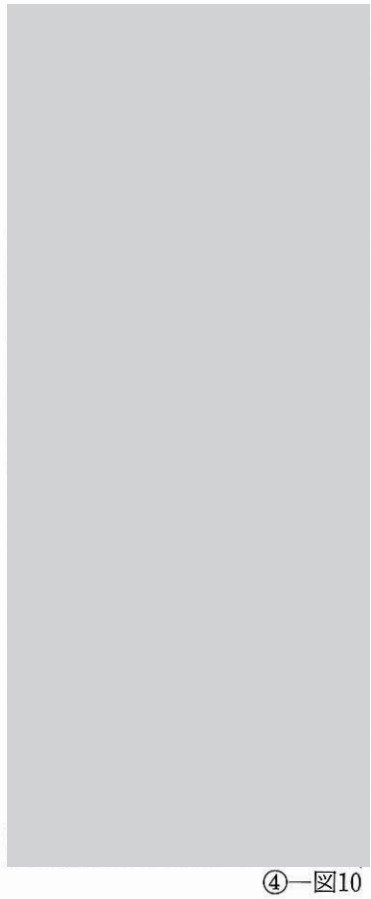
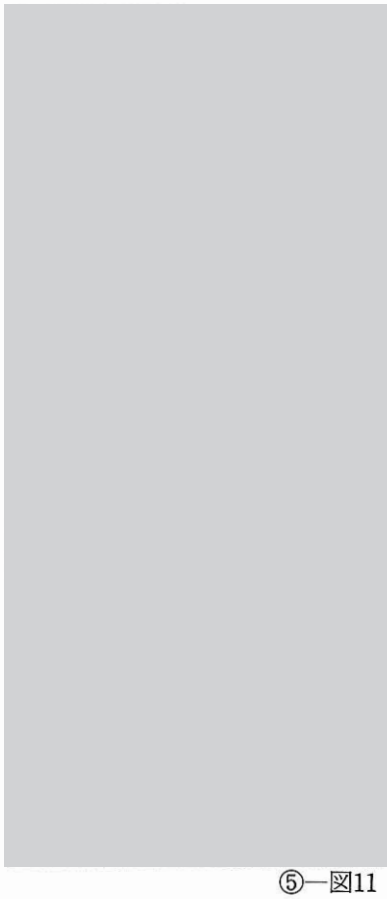
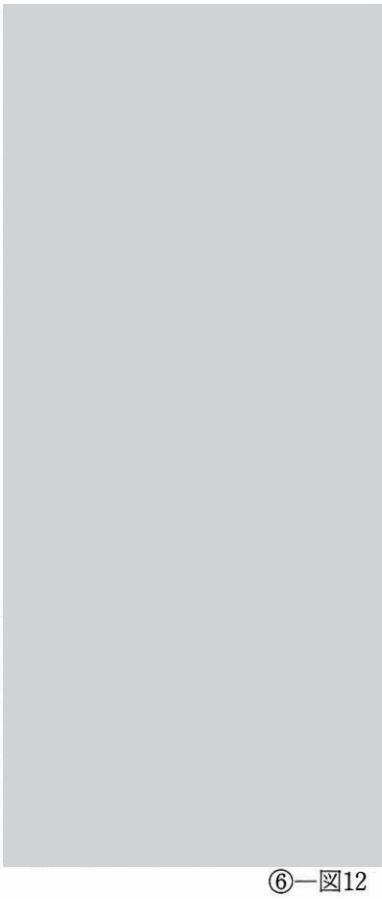
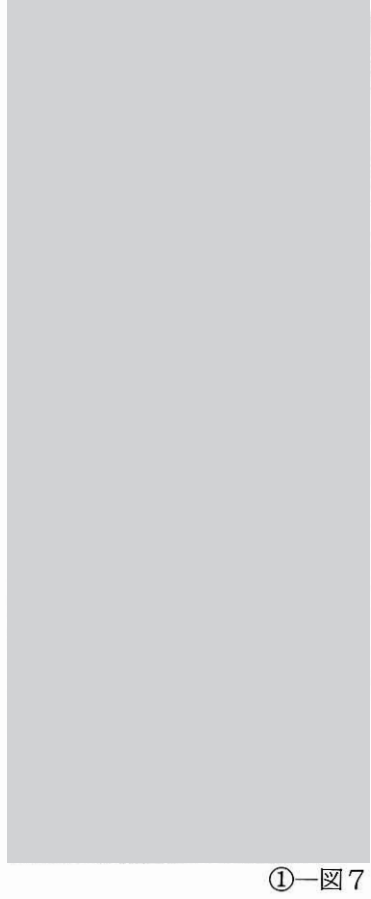
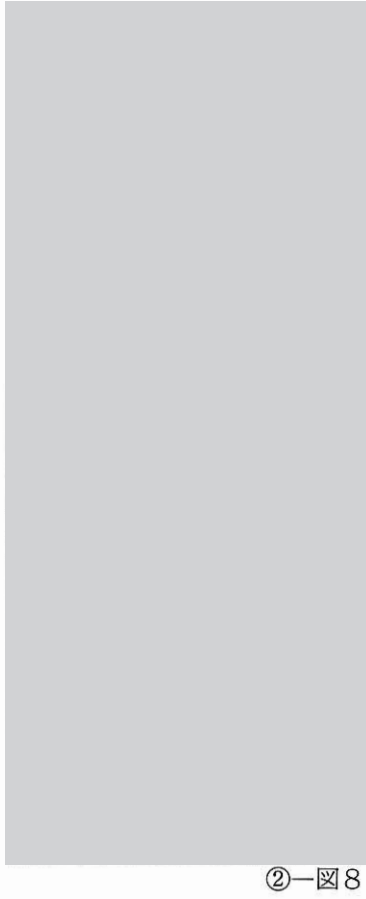
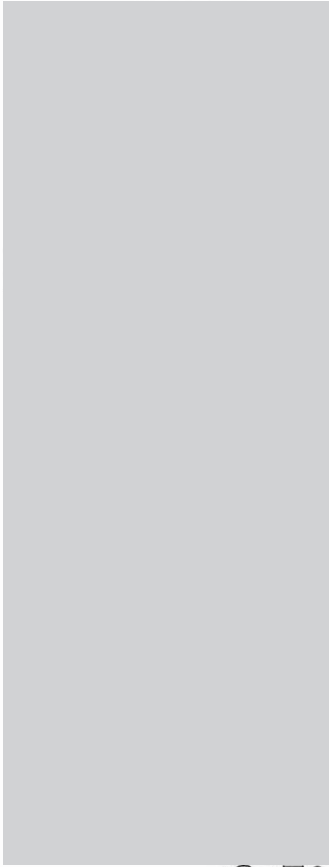
图6 桐竹鳳凰蒔繪鏡箱（底部） 熱田神宮

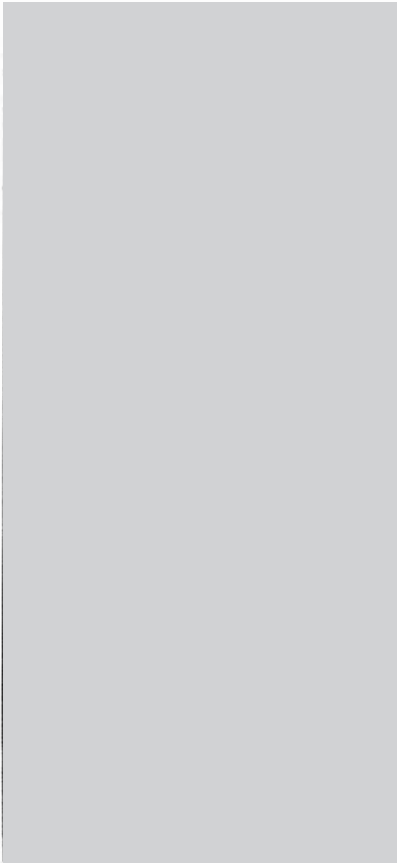


图4 桐蒔繪笏箱（部分） 京都国立博物館

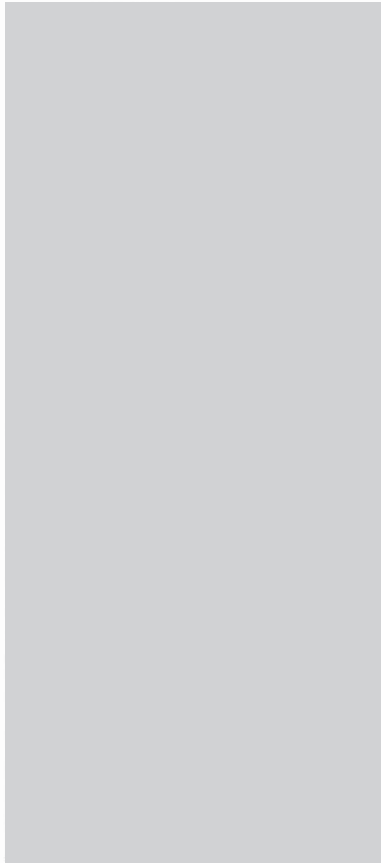
大覚寺 帳台構の桐竹蒔絵

①—
|
②7

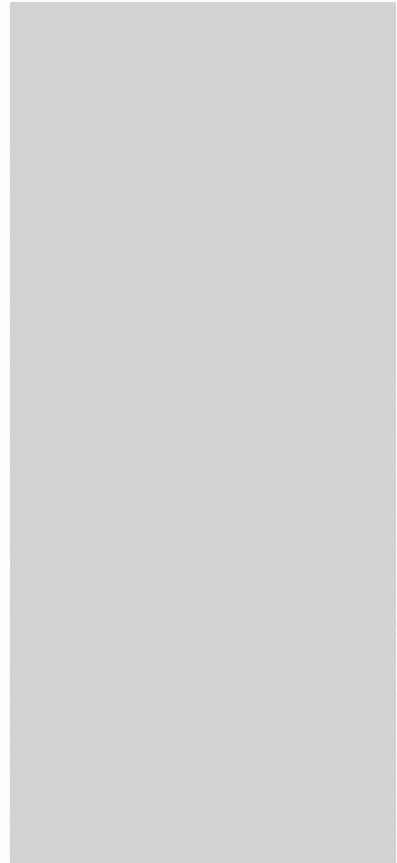




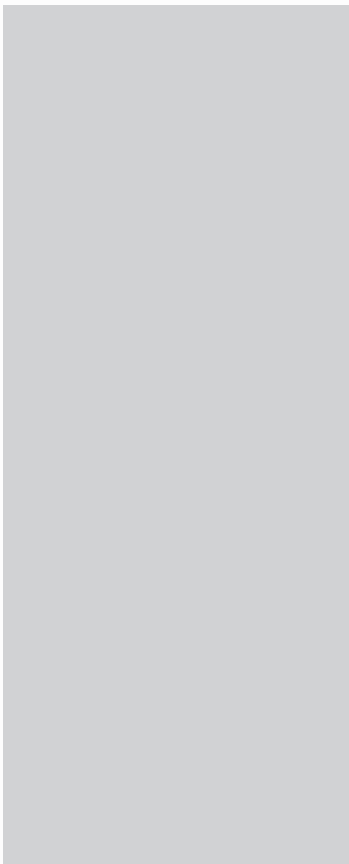
⑨—15



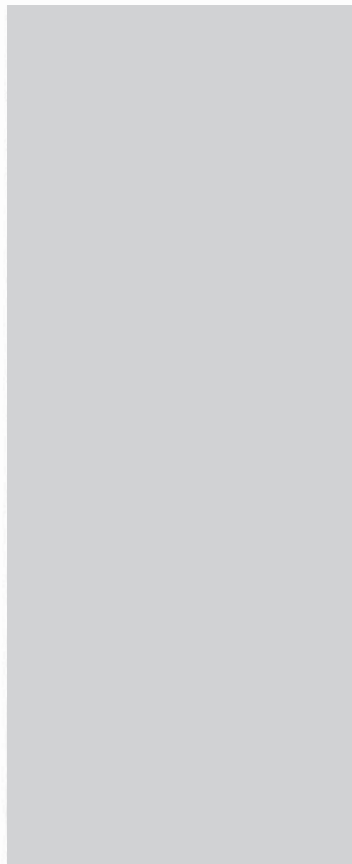
⑧—14




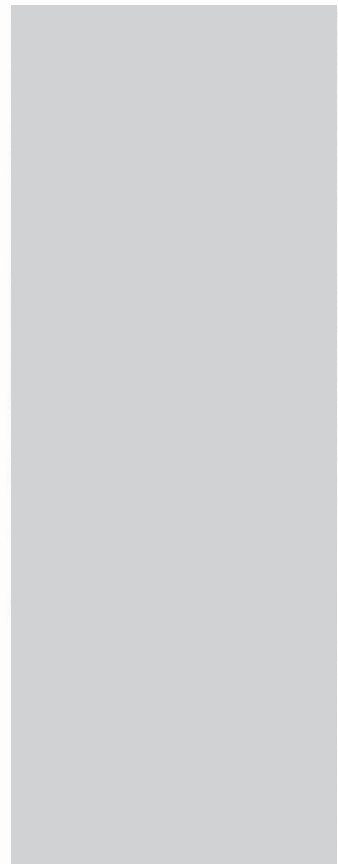
⑦—13




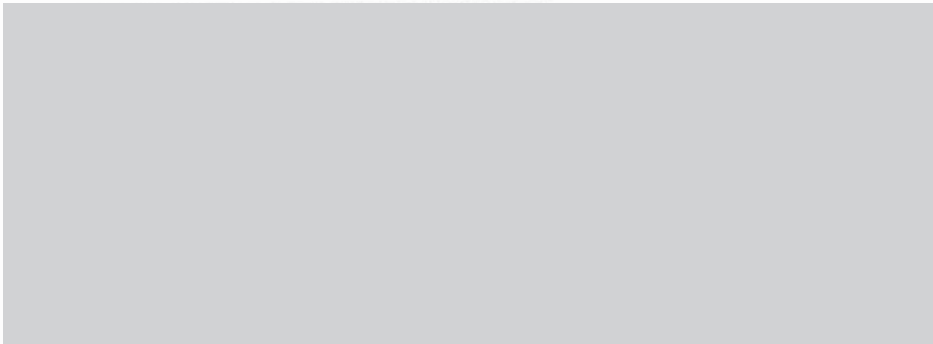
⑫—18



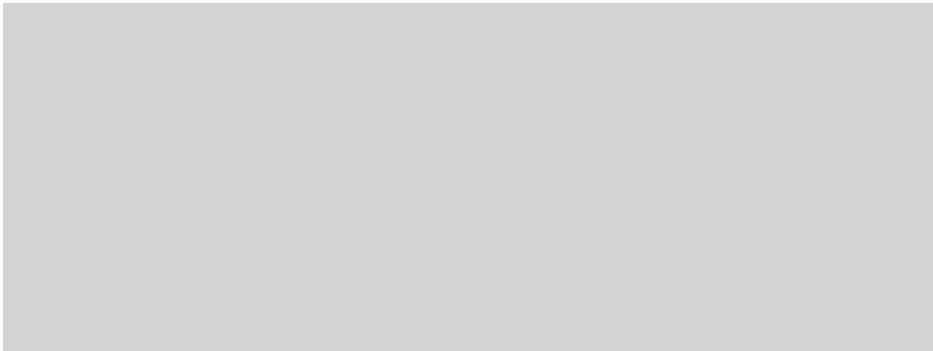
⑪—17



⑩—16



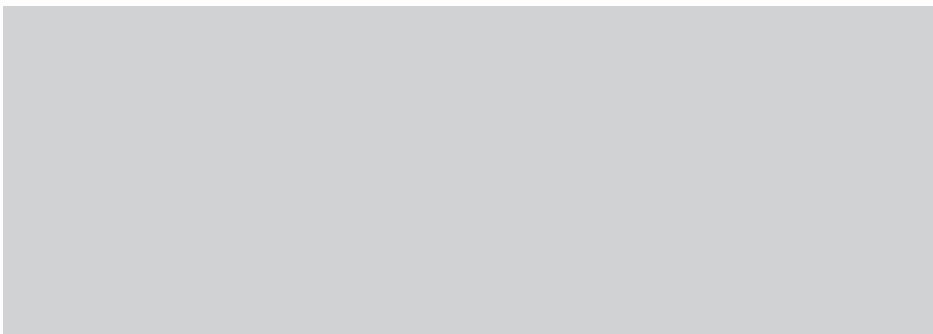
⑬—图19



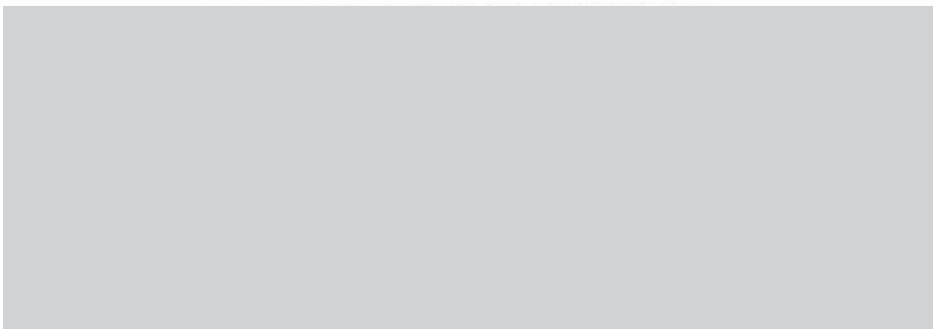
⑭—图20



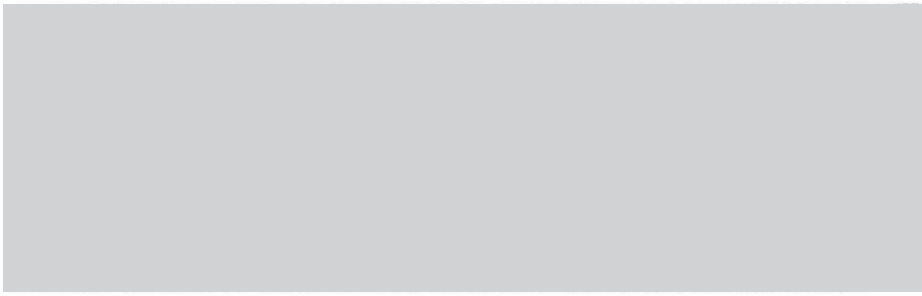
⑮—图21



⑯—图22



⑰—图23



⑱—㉔



⑲—㉕



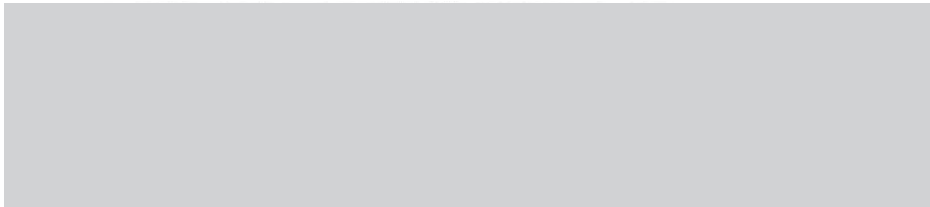
⑳—㉖



㉑—㉗



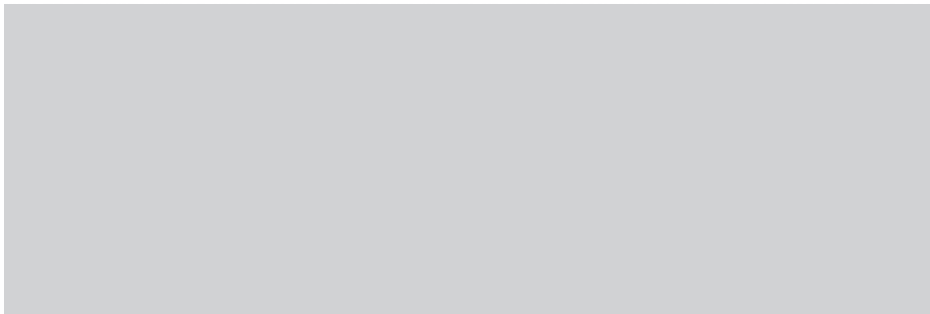
㉒—㉘



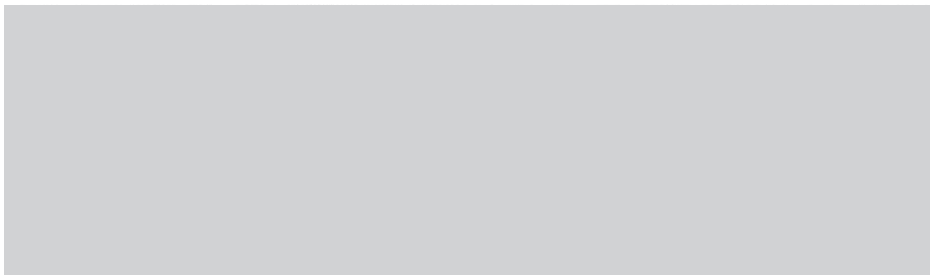
㉓—㉔29



㉔—㉕30



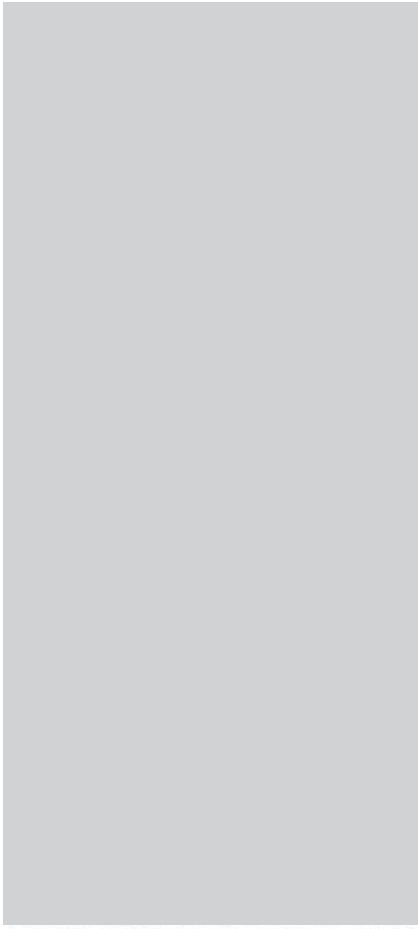
㉕—㉖31



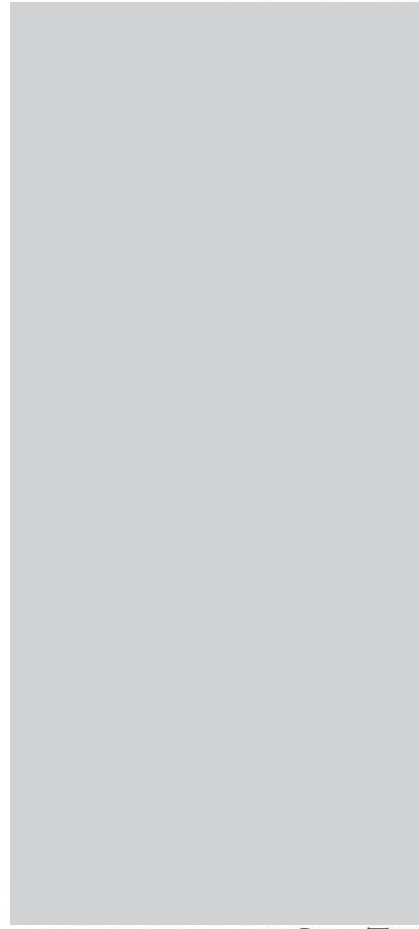
㉖—㉗32



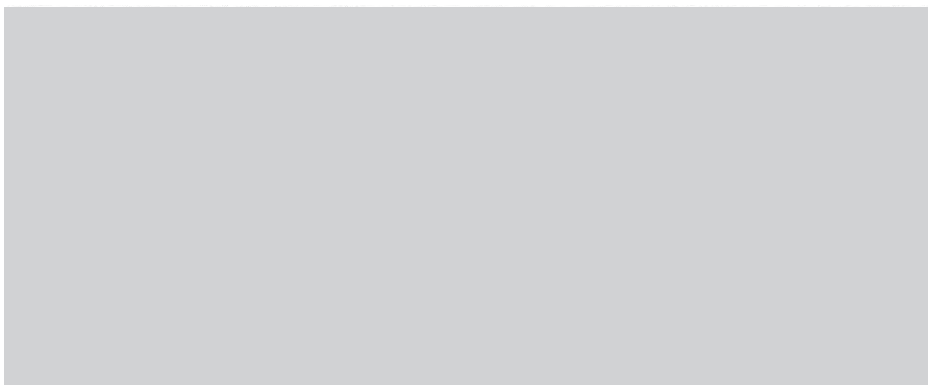
㉗—㉘33



④—2 图35



④—1 图34



金具—图36



図37 桐竹蒔絵硯箱 サントリー美術館

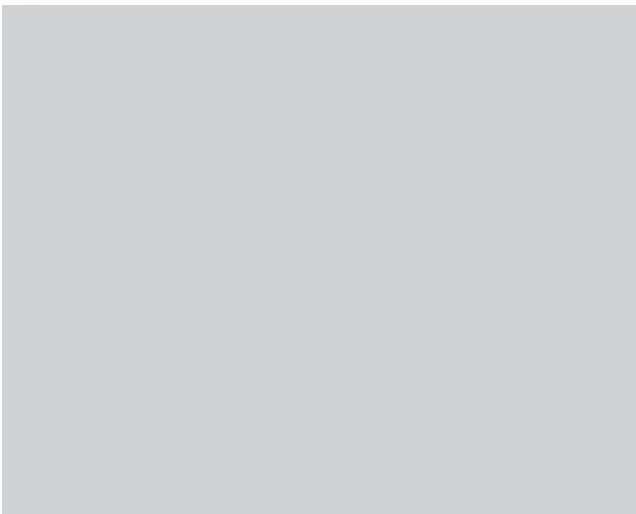


図39 桐竹蒔絵手箱（蓋表）

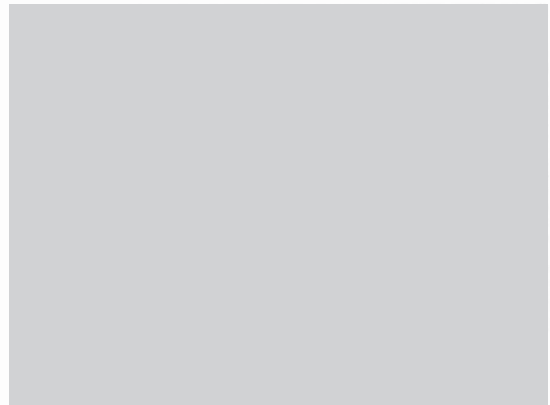


図38 桐竹蒔絵手箱 京都 個人

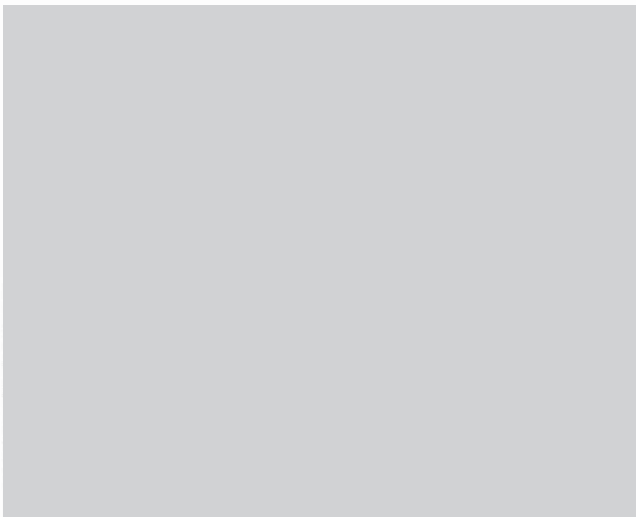


図41 桐竹蒔絵手箱（懸子）

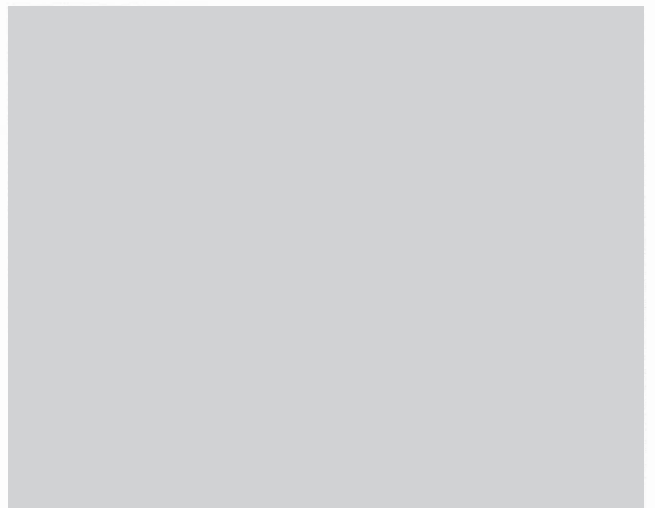


図40 桐竹蒔絵手箱（蓋裏）